

スピリチュアリティの実践による癒しの体験談の聞き取り調査

天野紗緒里 文化人類学分野・専門 博士後期課程3年

研究背景 近年、様々な宗教に通底する概念を個人がブリコラージュして解釈し、その信仰・実践を行うスピリチュアリティという現象が、現代的な宗教形態の一つとして議論されている。2000年代以降の日本では、スピリチュアリティの「癒し志向」が指摘されているが、その実態を明らかにするための個別の事例研究には余白が多い。本プロジェクトは、「ハワイ州におけるスピリチュアル・ツアーを主催するヒーラーのライフヒストリーと聖地への言説の収集」として助成を受けたが、コロナ禍により計画を変更した。具体的には、国内でスピリチュアリティの実践提供者や愛好家を対象に、癒しの体験とパワースポットについて聞き取りを行い、癒しが必要となった原因と癒しの実感、パワースポットと癒しの関わりについて分析した。

調査対象・調査方法 本プロジェクトが対象としたスピリチュアリティの実践提供者は、第六感を用いた占いをする人やエネルギーワーク（気功やレイキヒーリングなど）をする人である。愛好家は定期的にスピリチュアリティの実践を受けている人である。愛知県3人、青森県1人、兵庫県1人、大阪府1人、長野県1人、岐阜県1人の計8人（男2人、女6人）のうち、6人が実践提供者で2人が愛好家である。このうち7人の年齢は40代後半～50代後半で、概ね10年以上、スピリチュアリティの実践に関与している。残りの1人は30代でスピリチュアリティに関心を持ったのは最近である。調査は2020年9月～2021年3月にかけて、十分な感染症対策をとったうえで行った。

結果と考察 インフォーマントがスピリチュアリティの実践に初めて参加したきっかけは偶然性が高く、癒しへの期待値は低かったことが明らかになった。人生苦として生じた出来事は、魂の学びのために自分で決めて生まれたとして個人主義的な宿命論で解釈されていた。出来事に対してネガティブな認識や感情を抱いて苦しむ主な原因は、現世の親子関係で生じた自己の歪みとして語られる傾向があった。しかし、一旦、生きづらさを親のせいにしたとしても、歪んだ自己の修正は自己責任とされる。これは現在の親子関係の困難さが前世の関係性から説明される場合でも同様である。そして、現在の関係性から学ぶことがあると解釈される。こうした認識の下、蓄積された未消化の負の感情を解消することで癒しを実感されていた。先行研究ではありのままの自己肯定が癒しとして捉えられているが、感情の解放が不十分なうちは真の自己肯定には至らないと認識されているため、自己肯定以前に、感情の解放が重要であるという認識があった。

パワースポットは、そのほとんどが従来からの観光地であった伝統的な宗教施設で展開している。先行研究では、スピリチュアル好きな人は、現地の宗教的・地域的文脈に短慮な自己中心的信仰実践を行う人として捉えられがちである。インフォーマントは多くの場合、自然の中でスピリチュアリティの実践を行い、参拝方法も一般的である。また、現地の聖地へ行く場合は、事前に情報収集したり、地元の人から許可を得ていると語った。彼らは現地の信仰を尊重していると認識しており、先行研究の描き方とは必ずしも一致しない。また、パワースポットはいい場所・悪い場所があると考えられているため、パワースポットを判別できる人からの情報や自分でいいと感じた場所が選ばれていた。自然の力が浄化と癒しの効果を高めると認識され、自然の中に行くこと、特に、そこで瞑想を行うことが、スピリチュアリティの実践として積極的に行われていた。

こうした個々のスピリチュアリティの実践は、最終的には輪廻する〈私の御霊磨き〉の物語に集約されていくため、本プロジェクトの結果を踏まえ、それぞれの実践がどのように関連して総体をなすのかについて今後、さらに考察したい。